

令和4年度 結果の分析及び今後の改善策(案)

( 中間・最終 )

呉中央中学校区 校番 13呉中央中学校

重点	d 中期(3年間) 経営目標	e 短期(1年間) 経営目標	l 結果の分析 (結果と課題をこう考えます)	m 今後の改善策(案) (こう改善します(案))
***	<p>「主体的, 対話的で深い学び」の実現 (教務・学年)</p> <p>基礎学力の定着 (学年)</p> <p>家庭学習の習慣化 (教務・学年)</p>	<p>「主体的, 対話的で深い学び」の実現 (教務・学年)</p> <p>基礎学力の定着 (学年)</p> <p>家庭学習の習慣化 (教務・学年)</p>	<p>「授業の中で『思考し表現している』』と回答した生徒の割合は全体で88%で、目標値を2ポイント下回った。前回と同様に、コロナの影響で、思考過程の工夫を意識した授業づくりが十分にできていないことが要因の1つと考えられる。</p> <p>定期試験(国・数・英)における通過率30%未満の生徒の割合は平均10%であり、目標値の9%より1ポイント高い値であった。前回よりも数値が高くなっているが、試験の難易度が上がったことが要因の一つと考えられる。</p> <p>全体の家庭学習目標時間の達成率は64%で、目標値を1ポイント下回った。学年間の数値の差が大きいことが課題である。</p>	<p>コロナによる活動の制限が緩和されたので、コロナ禍以前のような授業スタイルに段階的に戻していくことで生徒の思考力・表現力の向上を図りたい。</p> <p>教科による数値の差が大きい。同じ教科でも中間と期末での差が大きいものもあるので、試験の平均点の差がなるべく出ないように、試験内容の見直しを図っていききたい。</p> <p>9年生は76%と、高い数値になっている。これに対して、7, 8年生は数値が低い。進路学習等で学習に対する意識の向上を図っていききたい。</p>
**	<p>「心の居場所」がある学校づくり (学年・生徒指導)</p> <p>道徳的実践力(自己指導能力)の向上 (教務・学年)</p>	<p>「心の居場所」がある学校づくり (学年・生徒指導)</p> <p>道徳的実践力(自己指導能力)の向上 (教務・学年)</p>	<p>生徒自身が主体的に取り組む行事やイベントを実施していく中で「自分には良いところがある」85%「安心できる居場所がある」94%「先生に相談できる」85%と前学期と比較してアンケートで肯定的な評価をした生徒は微増した。制限が多かったコロナ禍から少しずつのびのびとした活動ができるようになり「自分らしさ」を発揮できるようになりつつある。一方で「自分には良いところがある」と考える生徒の数に学年間で差異が大きいのが課題である。</p> <p>「あいさつ」「返事」「時間」「掃除」に関するアンケートに肯定的な評価をした生徒の割合は96%で、目標値を達成できた。コロナ禍で自粛していた大きな声での挨拶や返事の指導を再開したことが、肯定的な評価の向上につながっていると考えられる。また、清掃活動への取組の姿勢も向上している。</p>	<p>前学期同様「悩みを聞ける面談機会」の安定化と全教職員の情報共有による個に応じた指導の徹底など、継続的な支援を引き続き行っていく。同時にコロナ禍の制限が和らぎつつある今だからこそ、生徒会を中心に「生徒主体」の学校作りをすすめ、生徒それぞれが輝く機会を創出していき。例えば生徒との話し合いによる「校則の見直し」などを成果として残していききたい。</p> <p>「あいさつ」「返事」については、引き続き大きな声での挨拶の指導を行っていききたい。清掃活動については、掃除の手順等について指導の必要性を感じる。来年度に向けて準備していききたい。</p>
*	<p>体力・運動能力の向上 (体育科)</p> <p>基本的生活習慣の定着 (学年・生徒指導)</p>	<p>体力・運動能力の向上 (体育科)</p> <p>基本的生活習慣の定着 (学年・生徒指導)</p>	<p>前年度よりも記録が伸びた生徒は、20mシャトルランでは、男子91%、女子57%であった。運動機会の減少や感染拡大防止対策のため、活動が制限されているなかで成果はでてきているが、体力・運動能力の二極化が大きくなったように思われる。男女とも20mシャトルランに依然として課題がある。</p> <p>「三点固定ができています」と肯定的な回答をした生徒は、7年生が66%、8年生が76%、9年生が73%であった。多くの生徒が生活習慣の安定に欠けていることを自覚している。</p> <p>遅刻については、延べ回数で7年生95回、8年生353回、9年生262回であった。2学期は気の緩みから前学期に比べて数値が悪化しており、登校時間の終了間際に駆け込む生徒も多い。保護者と連携による改善を図っているが、遅刻を繰り返す生徒の中には保護者との連携効果が見られない場合もあり、アプローチを生徒の実態に合わせて変えていく必要がある。</p>	<p>小中で課題を共有し、継続的な取組が必要である。体育的な活動の楽しさを味わい、運動への興味関心を高め自ら運動機会を増やしていきとうする生徒を育てる。特に運動嫌いの児童・生徒には、できた・分かったという喜びや達成感を味わえるよう支援する。</p> <p>保護者との連携効果が見られる生徒には継続して取組を実施していく。そして、その効果が見られない生徒には担任や生徒指導部の教員による個別の面談機会を設けるなどして、「遅刻」に関する認識を改める機会を作っていく。さらに、生徒会にも協力してもらい、生徒主体で遅刻をなくすにはどうしたらいいか、というテーマで「自分たちの問題として」主体的に関わらせながら問題解決に取り組んでいききたい。</p>
業務改善	<p>生徒と向き合う時間の確保</p> <p>時間外勤務の縮減</p>	<p>生徒と向き合う時間の確保</p> <p>時間外勤務の縮減</p>	<p>生徒と向き合う時間の確保ができていると回答した教員の割合は80%で、上半期のアンケートの数値と比較すると2ポイント上昇した。時間外勤務が月45時間以下の教職員の割合は70%であり、目標値を達成している。しかし、45時間以上の教職員は固定化する傾向にある。</p>	<p>ICTの活用を推進し、紙媒体での資料をできるだけ減らす。生徒指導員やスクールサポートスタッフ等との連携を密にし、業務の分散と簡略化を図る。また会議の所要時間を事前に設定し、効率的な会議を行う。</p> <p>教職員の部活動等の分担の見直しを行い、定時退校の呼びかけを継続する。</p>